

猿 橋  
小学校

# 瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

## 読んでから見るか、見てから読むか

校長 澁谷 一男

台風一過のよく晴れた昼休み、芝生広場では黄色い帽子を空に向けて盛んに投げている子がいる。お目当ては「あれだな」と思いながら近くに行ってみると、果たして、空には無数の赤とんぼが飛び交っていた。「校長先生、さっき一匹捕まえたんだよ。」なかなかの腕利きのハンターだ。秋も日に日に深まっている。



読書の秋。折しも、当校も読書週間である。

「読んでから見るか、見てから読むか」古い話で恐縮だが、これは、1970年代後半にテレビCMなどでよく耳にしたコピーだ。某大手出版社が小説を映画化したときに使用されたこのコピーは、日本中の書店と映画館を席卷した。相乗効果により小説も映画も次々と大ヒットし、「読んでから見るか、見てから読むか」は当時流行語にもなった。

私たちは本を読むとき、書かれている情景や人物像を思い浮かべながら読む。

「いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根がわらが光っています。墓地にはひがん花が、赤いきれのように咲き続けていました。」

これは、4年生の教科書にも載っている「ごんぎつね」の一節だが、読み手は、思い思いによく晴れた初秋の風景を頭の中で映像化する。活字を頭の中で映像に置き換えるこの作業は、想像力を飛躍的に向上させるという。読書が想像力を豊かにするゆえんである。想像力を豊かにすることは、人を思いやる心や人の痛みが分かる感性など、感受性を豊かにすることにもつながる。

一方、映像化されたものは、場面の状況や情景などは一目瞭然で、そこに関しては、ほとんど想像の余地はない。先ほどの「ごんぎつね」も、物語を読む前にビデオを見たのでは、情景は自由に想像されることなく、固定化されてしまう。もちろん映像には映像のよさ、素晴らしさがあるのは言うまでもない。が、教育の場においては、「読んでから見るか、見てから読むか」と問われれば、「読んでから見る」が正解だろう。この機会に、子どもたちには多くの本に触れ、豊かな想像力・感受性を培ってもらいたい。

先日行われた音楽学習発表会。心を一つにして発表する子どもたちの姿に、大いに胸を打たれた。美しいものをみんなで創り上げる活動を通して、子どもたちは、ここでも感性を磨き、多くのことを学んだことだろう。芸術の秋もたけなわである。